

# 上矢敲氷伝 — 天明五年〜六年 —

清水茂夫

天明五年（一七八五）五十四歳

## 一、俳諧活動の実態

この年の敲氷の俳諧活動は、第一坐右稿と第二坐右稿が現存しているので、年間を通してかなり詳細に知ることが出来る。

（元旦）の発句は「閑居試翰」と題して「めざめよとけさ春の風春の水 平橋庵敲氷」である。前年は三月十日に上方俳諧行脚に出、帰途、東海道を経て、江戸の老師門瑟の草堂に身を寄せて俳諧興行を続け、師走廿一日帰庵した敲氷である。その間、平橋庵は閉されていたのではないが、宗匠として門弟に対する直接の指導は不可能であった。今年こそは十分な指導をしなければならぬ、という意欲が、この句に現れているように思われる。春の風春の水という繰り返しの中に単に新春を迎えた喜び以上のものが感じられる。（二日）には「春興」と題して、「隠居とはいはで

知れたり窓の梅」と吟じた。この句でも、あわただしく俳諧行脚に暮れた生活から脱却して、閑静を求め愛しながら落ちつきのある俳諧興行を志向しているようである。(四日) 荻原村の里橋が訪れた。「春雪やまだ塗杖に取付ず 里橋」「うぐひすに宿かさん笹原 氷」と吟じている。荻原村は上と下に分かれ、今は塩山市となっている。かなり遠方から訪れた客であり、初客の来訪を歓迎している。恐らく俳諧が興行されたのであろう。(五日) 昨年上方俳諧行脚に敲氷と同行した南浦からの旧臘出しの手紙が届いた。南浦は上方行脚から東海道を経て江戸に至り、江戸で生活するようになったようである。手紙には「梅がかや朝日くり出す綱渡し 抱山字」「鶯や解た湖水の縁伝ひ 同」の句が記されていた。抱山字は敲氷の師門瑟の軒号であるから、南浦も門瑟に師事するようになったと思われる。(六日)「訪へかしとさく梅枝の片折戸 琪丁」琪丁が平橋庵を訪問しての句である。(七日) 七草の粥を祝う節句日である。夕、例の人々(従来からの門人たち)が会して歌仙興行をする。各々人日の発句をよむ。「七草や打はじめには 震ひ声 氷」(八日)「若草や寝て見たうなる男山 其扇」(九日)「雲立ず風立ぬ日に接木哉 鬼明」(十日)「船のない川に舟呼ぶ雪解哉 紫明」。「梅さくや軒にちらばふ鮑屑 松岨」(十一日)「餅搗や信濃男は頼れず 風青」(注九日以降、句と俳号だけが記されているのは、平橋庵を訪れた者の句とその俳号だけを簡素化するために掲げたのである。以下も同様。その他に文通によって送られて来る句が多いが、その折は文通として掲げる。)文通。丹波亀山 逍遙窩金瓦から求められて「聖廟奉納 吹通す右近の馬場や梅の風 敲氷」「待花二章 野ざくらに花待顔の出茶屋 哉 氷」「花よいかに早振売のさかり鯛 氷」

(十二日) 定会初。百韻興行。「鶯や解た湖水の縁伝ひ 抱山字」を立句とし、平橋の脇句「旭の登る柳幾本」で始まる、脇起百韻興行である。連衆は梅業・此年・杜栄・路杏・勇記・百菜・曲肘・和秀・春夕・花青・茂林・曙白・梅守・元齋・五民・止孝・青羊・嶺夕・阿水・溪十・旧鴉・雨光・何鳥・如水の二十五人である。会の後この百韻は

江戸の抱山宇に送られ加点点されている。その優秀な作者は、元齋十八点、止孝十五点、何鳥十五点であった。なお、各々梅の発句が吟じられた。「幾年か朽さりもせて梅の花 水」「青柳や草の庵の菅すだれ 水」

(十三日)「物くさの名を改めて太良月 蔵六」(十四日)「春雨や昼も繩索ふ爺が宿 水」(十七日)善光寺に詣でる。「立よどむ参り下向や藪の梅 梅兄」(十八日)「醇翁母必居士世にいまそかりしほどは、不羈放蕩にして、『樽かぎり巾着限り手を打て算用済んだ娑婆の飲あけ』といへる夷歌を口ずさびつつ、白雲の郷に赴れしを悼で、盃に似たる椿を手向草 水」。母必は岐阜の中川原新田の油屋であった加島善右衛門(俳号鷗歩)の次男であると言われる。貞享五年六月芭蕉が鷗歩の十八樓を訪れ「十八樓の記」を記したことは知られている。鷗歩の跡をついだ兄が世を去ったので、母必が一度は十八樓の主となったが、放蕩のため故郷を去り、明和の初年ごろ甲斐の四日市場石川家に入り林蔵と称した。曹洞宗元正寺にある過去帳によると、天明五乙巳正月十八日に没している。冬嶽樓・半峯亭と号し、敲氷が鳥我を称して、明和四年歳旦帳『はつ硯』を出版した時から没するまで、敲氷に支援を与えた。酒に溺れる母必ではあったが、詩情のある俳人でもあっただけに敲氷の悲しみは深かったであろう。

(十九日)「年毎に普請愛でたき乙鳥哉 敲柳」。「臘夜や雪が降ろうといふも有 如想」「如想ぬしは去にしとし家とうじに別れて、ひとり寝習ふ師走哉、と哀傷の吟の聞えけるに驚きて申贈る。「梅がかも獨聞くらむ圍の窓 水」(廿一日)甲府に赴いて廿四日帰る。府下の門弟の指導に赴いたのである。(廿一日)如雪庵に投宿する。如雪庵は俳号尺五。その師は浮亀庵卷阿で、敲氷の師抱山宇門瑟の弟子である。卷阿も門瑟も共に守黒庵柳居の弟子であり、共に柳居門の俳人として相互に援助し合う親密な交友ぶりで、そうした同門意識は敲氷と尺五にも顕著に見られる。(廿二日)飯田に投宿する。飯田には代官所や江戸から派遣される役人の官舎があり、そうした人々に俳諧を指導するためであった。その飯田官舎に住む雅重ぬしが、一女子をもうけ、掌中の玉ともてはやしているのを祝って、

「羽子板の音やひいふうもとせも」と敲氷が発句を吟じ、雅重が「梅の笑顔に移る日の影」と脇を付け、歌仙が興行された。各々探題に「降りをしみ／＼てや春の雪 氷」。(廿三日) 飯田官舎の其扇の許に遊び、床に麦林叟の柳に野鳥の画賛の懸っているのを見て「はいかに眠れば叩く柳哉」と敲氷が発句を吟ずると、其扇が「牽立てられてゆく春の駒」と脇を付け、歌仙が興行され、探題もあつた。「物がたく城から出たり若菜摘 氷」(廿四日) うかひ山定会初め。各々題鶯。「鶯に衆生の夢を覚しけり 氷」。うかひ山は鶯飼山遠妙寺である。石和宿にある日蓮宗の寺で、日蓮上人が鶯飼の霊を濟度したという伝説や謡曲で名高い。この寺の百朶上人は敲氷の指導を受けて俳諧に熱心であつた。上人自ら月次会を催し、敲氷もよく参加している。文通、「直なもの売る世嬉しき葉竹哉 静寿」「踏込んで池の中ゆく枯野哉 乱竿」「宵闇の雨誘ひ出す千鳥哉 巴草」「山茶花や晴れ行雨に花の艶 同」。(廿五日)「けふこそは尋ねあてたれ初桜 松秀」「芳しからぬ草葺の宿 氷」を発句・脇として、歌仙一折を興行する。一折は懐紙一枚を二つに折って、表に六句裏に十二句を記すので、初折の表裏十八句を言う。法楽はここでは神仏に奉る発句の意である。敲氷は法楽として、菅原道真を祭る、京都の北野天満宮を頭に画いて、「北野とはいへども早し梅の花」と吟じている。(廿七日) 花輪の和秀子の隠居を祝って「浮世を隔る中垣に桃さくらほり植て、こゝろのどかにすみなざる仙鈍窓(隠居前は百童斎和秀)のあるじをほぎ侍て、「花の雲深き所に編戸哉 氷」と吟じた。また、紫明・松秀の二人と廿六日夜に夜話した句「鶯や山の初音はいざしらず 紫明」と「花守も宿には居らず遅桜 松秀」の二句を記している。(廿九日)「初秋や不二紛るゝ雲もなし 梅丈」「横雲の帯して星の別哉 同」。

(二月二日) 八代の養老園に投宿した。(三日)「梅が香や昼なら駕の立処 松秀」「春雨やあられのまじる里の奥 紫明」(五日) 山梨岡(「甲斐国志」には日光権現とあるが、山梨岡神社とも呼ばれる)の神官中村氏の許に会して、各々神祇桜の発句を吟じた。「茶屋はまだ葺合せずや初桜 氷」(六日)「花簪の寺へ土産や桜海苔 梅守」(九日) 紫

泥君に陪従して鵜飼山に参詣する。「祖師のたね蒔たる蓮の盛哉 水」(十日)「梅がかや猫は耳から日のぬくみ 東谷」。送別吟、「鍼砭の術は人の一身を藥箭たぐやくにして補瀉十全の功をなし侍るとぞ。春夕ぬし此術に遊んで人を利し身を養ふ。猶はた奥儀をさぐり得てんと、ことし東の都に赴くに、蠶叢の道のほどもかの十餘り四つの経路にひとしく、爰によぎりかしこにそゞぎて日夜絶ざるに、思を回らす成べし。「道草にひねれ薊の針迄も 水」去る六日に贈る。」(十二日)「青物の塵なまは時めくひがかな 水」(十五日)曙白・錦鳥のふたりのぬしが、老後の杖と頼む、かしこき嫩に別れて、ただぼんやりと閉じこもっているのを見舞って、「まゝならぬ霜の痛みやさゝみたづま 水」「さゝみたづま」はイタドリイタドリの古名、または春の若草の意味であるが、江戸後期の歳事記類ではイタドリイタドリの意に解し、二月の植物として従うべきであろう。(廿日)逸見蔵原(現北巨摩郡高根町)の關阜が、鎮守宮への奉納の額に乞われ「種池や種の栄を守り神 水」(廿二日)文通、「若草や河原は水をまだ知らず 柳儿」「煤掃や打つは筵の音羽山信楽花星」(廿三日)「松江の鱸の膾に古都をおもひし人には品かはりて、嵯峨野の柿の荒につかんことをうしろめたしと落柿舎に帰赴るゝ重厚叟を送る。柿の芽を見て覚けるか旅の夢 水」「返し、雪解や旅に驚く忘川 重厚」、「はやり来て左背子舞けり春の庭 同」、「住吉の御田に下りて春の雁 同」、「初秋や日蝕晴て風かはる 同」兎秀子十三回忌に、「西へさす枝から彼岸桜哉 水」(廿四日)丹後宮津から市三郎という人が手紙を持参した。紫明に五十賀を祝つて贈つた句「轉りの声も老せぬ五十雀 水」(廿五日)笛川舎で聖廟法楽の会があり、題松「神代から幾十かへりぞ松の花 水」。日本で聖廟とは、特に菅原道真を祭つた廟をいう。道真の忌日が二月二十五日である所から天満宮に法楽の会を催したのである。また、草稿「点卷」は、玉朶・平橋・茂林ら十二吟百韻で、如雪庵尺五の評を受けている。天一花青、地一曲肘、人一玉朶。(廿七日)「若芝や馬士は匍匐はらばら土手の上 烏曉」「丸木橋既に落べし雉子の声 仙斧」(廿八日)丹後から文通、「また梅の道一すじや春の雪 冬谷」「鶯や朝日の枝へ飛直し 涼雨」「蝶々や座

敷迄野の溢れ物 仙杏「客の數揃うて嬉し初茄子 鳥語」(廿九日)「鶯の身震ひおかし雨の朝 巴草」「若草や水口  
祭る白幣 瑚石」

(三月朔日) うかひ山下嶺南窓に会して、題桃「見て歩行こそ葉なれ桃の花 水」(三日)「曲水や流れて翌に成やす  
し 氷」「草餅やいもが垣根を摘尽し 氷」(四日)「若草や蝶の尋る花はなし 勇紀」(八日)「駒下駄で海かけ歩行  
汐干哉 北鳥」(九日) 山梨岡の神事に詣でて、「山梨の山咲ひけり神いさめ 氷」神いさめとは神楽など奏して神を  
お慰めすることである。上の句の季語は「山咲ふ」で、山の薄緑に色づきそめる明るい感じをいう。(十日) 武江書  
信、「羽子板で路次を明たり春の雪 静寿」、越後書信、「名月や一夜浮るゝ狐川 桐翠」「暑日や石匆返す板庇 嵐二  
(四句略)」「春風や草珍らしき加茂堤 鍊石(二句略)」(十一日)「山青う画く下地の霰かな 紫明、頭巾着た人ま  
だ多し初桜 同」(十二日) 信州書信、「陽炎や柳の外は動かせず 待竜」、「梅干に皺の寄る日や蟬の声 同」定会后  
夜坐、各々題花、「世の人のみな出て後に花見吟 氷」(十七日)「猶深く道を尋ねん花の奥 亀泉」を発句、「夏を  
隣に一つ家の軒 氷」を脇として歌仙興行をし、探題には「木がらしの吹かと思ふ茶摘哉 氷」があった。(十八日)  
鶴飼山下嶺南窓に会して、各々弥生山の題で、「大木の獨活も有けり弥生山 氷」(廿日) 青柳の烏橋ぬしに泊る。  
(廿一日)「此池の主は誰ぞ燕子花 北馬」「読さして須磨の夢見つ春の雨 柯東」「住居せぬ家を窺ふ乙鳥哉 白眉」  
「ほのく」と明たと見えて花卯木 川長」。折居(現韭崎市)の神官横森佐州の七十賀に松上藤と題して、「いつ迄も  
老せぬ友や松に藤 氷」(廿三日)「濡れるとも急がぬ道や春の雨 松秀、梅がかや残り多きは夜の道 同」、「いつの  
間にか傾く春と成りにけり 紫明」(廿四日)「留守の戸を預かるも又柳哉 雅重」廿四日から出て廿七日帰庵。三夜  
飯田(現甲府市)の相川亭に宿る。夜相川亭で、伊勢の浜荻で作った筆を試みてよと言われ、たとう紙に古歌を書い  
たのがあったので、そのことばによって、「ふづくえに打ふせる荻の若葉哉 氷」と吟じ、それを立句として歌仙を

興行した。後探題に木瓜を得て、「麗さへ浅間は凄し木瓜の花 水」。(廿五日) 停雲閣のあるじが、二見型文台に裏書を望んだので、「潮にも岩にも花や二見形 水」このほど聞いた発句、「杉村に声跪きつ時鳥 六和」「蝶一つ曠野へ吹かれく出る 朝道」「葉隠れに恥かし気也遅桜女花林」「初午や野も山もけさ青幣 魯水」「荒海を空へ包むや夕霞 同」、「我家まで引かせて見たし雪の舟 亀石」

(四月朔日)「いつにない朝起見せて膾哉 水」。武江から音書、「山吹や水ぎはくらき川の上 春夕」、「湊から四方へ配る乙鳥哉 同」、「苗代やけふ川魚の取はじめ 同」「玉川にて、春の日や水鳥は羽をさらし杭 同」「しのばずの池、蓮池の魚も浮てひがん哉 同」(二日)「待まじというて待けり時鳥 水」(五日) 天神中条(現増穂町)の天満宮奉納「唐土の梅見て来たり通夜の夢 水」。(八日)「血のくすり施す寺や仏生会 水」。(十二日)「軒伝ふ雫も甘し花御堂 五民」(十三日)「物字ぶ窓暗うする若葉哉 紫明」(十四日)「据て見る石燈籠や木下閣 紫明」、「角なく出て出る鹿淋し麦の秋 同」、「真似ようと鸚鵡も聞か杜宇 同」(十六日)「求己子は此ほどやつがれの草の戸叩きて、「尋来て一声聞かん時鳥」といへる趣を夢見玉へるよし、日頃の志浅からぬものから、かゝる事も夢中にうかびしをとかたじけなくて是に謝し侍る。「時鳥やすむ木もなし草の庵 水」扇子に筆染めよと求められて書き与えた。また、求古・鯉尺両子が来訪し、歌仙一折興行した後、探題で、「麦秋や野へ雇はるゝ角力取 水」と吟じた。(十七日、音書、「涅槃会や春の寒さもけふ限 秋瓜」「玄鳥やわたりはじめも橋の裏 同」「七くさや枯た千種の問より 同」「鳥啼て春めく竹の林哉 同」「むさし野へ朝々せまき霞哉 巴草」。(十八日) 松磯ぬしを悼「麦秋や噂いひ出す花の友水」(十九日) うかひ山下嶺南窓定会、各々題竹子、「笋や八百屋の夫婦のもてはやし 水」(廿日) 音書、「十万家大方留守や花盛 米珠」「山吹や影は瀬になり淵に成 同」「此奥に一木二木や遅桜 同」(廿一日) 如雪庵会へまかり泊って廿二日に帰る。(廿三日)「おそろしき藪に有りても柳哉 水」(廿九日) 音書、「鶯に奥ゆかしさよ竹格子 越

後并柯」「雉子啼くやすくく仲びる麦の中 同」

(五月一日) 田中(現一宮町) 飯島氏の画樓に遊んで、「絵襖や五月の闇もくからず 氷」を発句とし、「けふといふけふほととぎす聞く 文橋」を脇として歌仙興行をした。(二日) 秋江女の許に宿って、妹の梧遊ぬしの三弦を聞く。「水深く引手あやありあやめ草 氷」とたたえた。「妙恩大姉は日頃の作善怠りなく、今を限りの枕の上にも西方の道も嬉しやといへる一句を書残し申されしとぞ。其志のいさぎよきにつけていとど袂を沾し侍る。「紫の雲眺めやるあふち哉 氷」。(四日)「しのぶ草忍ぶに余るはたる哉 氷」。青囊の術を修得して故園に帰る箕山のぬしに贈る。「夏草に見るも葉よ園の露 氷」。音書、「山城のほの見ゆる日や郭公 巴草」「もやくくと霧の中から若葉哉 同」、「水上の桜はいかに筏さし 南浦」「一夜鮮待は長さよ夏ながら 秘沢」(五日)「草の戸に草珍らしき粽哉 氷」「又今年立殖したる幟哉 勇紀」(六日)こよひ松亭ぬし投宿。「鳩の巢を借りては休む蛩哉 松亭」「川うそを見た人もあり蛩狩り 氷」(九日) 府下にまかり、十一日帰る。(十四日) 瑚石雁坂越えて来訪。(十五日) 音書、「百姓の背戸に客あり桃の花 乱竿」「陽炎の中にかはくや種俵 同」「卯花や指べき門も建て後 老村」手もとから風みせて行田植哉 此巾」「花摘で葺合せたる産屋哉 五菊園相合」「朝露の京で焚る、黒木哉 枝舟」。武藤氏庸昌ぬしから写し絵一枚と「表秋のながめはあれど時鳥なく山里や人もとはなん」という和歌を贈られて、「椿野の月夜は無な郭公 氷」と贈った。(十七日)「世の塵を払うて橋の風涼し 露敬」に答えて、「鳩の浮巢に似たる隠れ家 氷」(十八日)「野も山も蚊屋干す色や更衣 信州桐羽」「巢離れの鳥居なじめる若葉哉 同」(十九日) 府へ赴き廿二日帰る。嶺南窓定会へ贈る。兼題、「秋風のそろく見ゆる青田哉 氷」。静寿は元服の時から官途に志し、丹後・大和から江戸に移って二年ばかり、この度甲斐にいる桂堂をしたい、旧知の人々をも訪ねようとして、一日平橋庵を訪れた。「あやめより長き咄や肘まくら 氷」(廿三日) 三花居士の小祥忌に招かれて「さびしさの日の来て袖を濡しけり 氷」(廿三



日) 田中にまかり廿五日帰庵。(廿五日) 蜀道(四川省即ち古の蜀に通ずるような至険の道路)に似ている険しい道を凌いで武陵に帰られる南枝ぬしを送って、「棚道を扇ひらきて譬へけり 氷」。音書、「ねぬなはに夜もすがら寝ぬ蜚哉 抱山」ねぬなはは根蓴菜のことで、根が長い。ここでは根蓴菜のように長い間という意。「湖の縁を取替すゞみかな 米珠」(廿七日) 青柳の巴東ぬしが没し、老母の残られたのを聞いて、いとどの哀傷を友人の許へ申し贈った。「嚙入梅のかはきもやらじはゝそはら 氷」はゝそはらは柞ははその樹の生い繁っている原、ははそはコナラ。ははそはのが母の枕詞となるように、ここでは、ははそはらに母をかけて使われている。また、歟沢の青柳氏の老父の死を悼んでは、「残る名も夏花げばなと共に匂ひけり 氷」と吟じた。夏花は夏安居に仏に供える花である。俳諧では夏の季語として使われている。(廿九日) 守黒忌「五月雨や關加桶の蓋に落一葉 氷」

(六月朔日)「悟らねど山出て来たり氷室守 氷」『御傘』(松永貞徳編、慶安四年刊)に「夏なり。惣別、氷室は四月朔日より九月尽まで献するものなれども、六月一日を肝要と用ふるゆゑに夏の季に相定むる義なり。」とある。敲氷が六月朔日に氷室守の吟をなした拠りどころとなるか。(二日) 陸奥二本松の金英が訪れる。「此の君の庵や涼しき旅の笠 金英」に答えて「汲まれて浅き池のうきくさ 氷」、同伴の芥舟の「茶の水に氷を敲く庵涼し」に応じて、「訪ふ人稀に蟬もしくるる」と敲氷が吟じる。また、金英から都留の郡に旅ゐして何がし和尚の法華の説法に随喜の涙が袂を潤した由を聞いた敲氷は「日盛や蓮の葉笠の羨まし」と詠ずる。簡潔な日記に風交の面白さが溢れている。「暑き日を竹よき程に動きけり 金英」「山もとに二夜寝にけり鹿の声 同」「日盛に僧のやどりや合歡の花 芥舟」「涼しさや三人笑ふ橋の上 同」。(五日) 柳美老衲文通、「雨晴て星の上飛ぶ蜚哉」(八日)「此程早魃をうれへて、雨乞の祈願爰かしこに待りしが、感応すみやかにして今夕雷雨」。「夜着たゝむ重さや蚊屋の釣はじめ 露敬」(十日)「飯時はをとも交る田植哉 十花」(十四日)「木鋏を持て見て居る若葉哉 平坡」「ひとり寝と人はいへども竹婦人

同」。甲斐の敲氷詞宗に初めて柴門をたたかれ侍りて「椎櫂や漏るともやどれ時雨空 松居」「そこはかとなき深き埋み火 氷」。更に「送別のこころを」と前書して「飛びついて放すは惜しし雪の竹 松居」上の二句は、去年敲氷が行脚の折節、松居は世をはゞかる事があつて逢ふことができなかった。よつて此ほど文通で申し来たたと記している。俳人の人間関係の親密さが想像される。なお文通で「真木入るゝ男の跡やみそささる 松居」「老の身のたよりなくて、尿瓶ほどかゝる子はなし夜の雪 同」。(十六日)「稻舟に飯積て遣る田植哉 五原」「夕顔の花や野上の荒屋敷 同」。(十九日)嶺南窓会、「立膝は木挽の癖や夕すゞみ 氷」(廿日)音書、「魚沈む美人の影や燕子花 抱山宇」「一しぐれ蟬をしづめて市の庵 同」「河がりや四十を越さぬ人ばかり 同」(廿三日)「寝た上に有りて涼しき雲の峰万作」を発句、「昼過てから庵のひるがは 氷」を脇として首尾吟興行。連句の首尾とは、歌仙または百韻の初折の表(首)と名残折の裏(尾)とつまり首尾を調えるという祝の意で、歌仙の首尾を調えると十二句となり、百韻の場合は十六句となる。そのどちらかを興行したのである。(廿六日)「風道はふさぎて竹に納涼哉 袋儿」「五月雨や眠気覚しに坐藤鞠 嵐二」「元舟へひそく通ふ螢哉 同」「蟬啼やむかしも今も同じ松 書川」(廿九日)「千疊に倦て見に出る青田哉 古硯」。青柳(現増穂町)角力句合跋。葛粉に砂糖を好む客あれば、索麵そうめんにからしを賞むる人有り。「西東床几を分けてすゞみ哉 氷」(晦日)年月のめぐるは早き茅輪哉 氷」。越後文通、「年礼に来る人もあり更衣秀外」「水鳥や皆向直る比叡おろし 同」「窮屈な城にも老木の櫻哉 同」。

(七月朔日)「口癖に暑しといへどけさの秋 氷」(二日)「秋立やものに実の入る日のはじめ 仲亮」「鏡台のさやけき窓やけさの秋 潤路」「剝捨てた爪も露けしけさの秋 百朶」。「薺や日々花の怠らず 珊瑚」に対して「久しく荒れし草の戸に露」と敲氷は応ずる。「としごろ願ひし三翁の画賛を得て、言の葉の果はしらぬ花野哉 眉長」と画賛を得た喜びを訴える門弟もある。(五日)梅兔居士の十三回忌を七日に當む由を一子弄春から申し来たので、「星に

かせむかしの人の筆すさび 水」と吟じた。(七日)「貸ぶりのわるき人なし星祭 水」。(十一日)文通、「蟻の巢に引づられけり栗の花 諷訪文輔」。瑚石が西山から帰る。「秋たつやけさは柘の葉のひかり 瑚石」。(十四日)武江周里ぬしの妻女身まかりしを悼で贈る、「蚊屋しまふ日も面影の立去らじ 水」。瓢閑禪門の身まかりしを盆会に申し贈る。「げにかりの世と云ぞ萩の花の露 水」。(十五日)「鴨焼の馬のと沙婆の茄子哉 水」。「たま棚や野より露けきかさざり物 瑚石」。(十五日)「おもしろし地主の木の間の高燈籠 水」。(十七日)「負うた子に教られけり高とうろう 杜栄」。「みかへる山の夜に入る月 水」歌仙興行。(十八日)静寿・夜涼泊る。夜話。「汚れたる村出離れて青田哉 静寿」。(十九日)「只ひとり見たり誠の初ざくら 如想」。「朝がはや目の賞合うて垣隣 同」(廿二日)「橋懸て待客もあり杜若 李言」。「たばね置て垣も結ばや萩の花 同」(廿三日)京から正月七日の消息届く。「老僧も頭巾忘れて摘菜哉 京高歩」。小林(現、増穂町)七面宮法楽、「賽銭も蓮の実も飛ぶ宮居哉 水」(廿四日)「秋たつやきのふの鐘はかねながら 晴月齋聞溪」。「小原女は牛や洗うて星まつり 都院」(廿五日)「待よりも今朝来て淋し秋の風 袋儿」。(廿六日)静寿が江戸の友どちの招きに旅立つを送別する。「とりあへず川辺の萩をわがねけり 水」。(廿八日、下部の湯に赴く途中吟、「初雁や画く間もなき屏風岩 秋江」に敲氷が脇「朝出のふねを送るかつらを」と付けて、歌仙一折興行。「ばせを葉や破れて明るき瓦燈口 露岱」。瓦燈口は家の壁などに火燈形に作った出入口。本来の火燈形でなく、上部を単純なアーチ形にしたものが多く茶屋の勝手口などに多い。(廿九日)「葬や垣の丝瓜を咲かくし 曙白」。「酒売たあるじ誘うて紅葉哉 同」。(晦日)「道を問ふ庵は爰なり薄原 許白」。「まだ声もたぬ初秋の鹿 水」。(八月二日)「初雁をとく見付たり渡し守 山牛」。「爰に庵建て住たき花野哉 琴糸」。(四日)北廓衆の会、五日帰庵する。(八日)「うっかりと寝る夜ではなし梅の花 草風」。(九日)「袖垣に綻の出る野分哉 柯東」(十日)あらそはぬ音おもしろし落し水 袋儿」(十三日)北廓君の月見の佳会にまかりて十四日帰る。(十四日)「月清光也。待宵や

宵と思へば鶏の声 水」(十五日)「はるばると来てただ一夜月見哉 水」。例の人々会して歌仙興行。漫興、「中わろきやうに並居て月見哉 水」「能友は夜更て来たりけふの月 水」。(十六日)「既望や浜松の音波の音 水」。書信、「夢の夜にも結ばずけふの月 如想」「旅より戻りて、床しさよきのふの嶺にけふの月 梅実」「名月や軒へばせをのそよぐ影 濶路」。池楊来訪閑談、「魂棚や見ぬ世の人の物がたり 池楊」「初雁や一声はまた海の上 同」「人しらぬ池にも満ちてけふの月 鯉尺」(十九日)午後より村雨。善光寺へ泊。長崎、猿子本名松尾市兵衛、太宰府聖廟へ奉納句勸進、一冊子へ認遣す。猿子の「回国遊日記」に、兄其勇の序があり、「夏山やすいと鴉のただ一羽 其勇」、辛丑の年と記されていた。天明元年から始まった勸進の旅であったと推定される。(廿日)書音、「雪解けや小御門出入る人の袖 京都蝶夢」「夕づくや隣の庵に海苔や焼 同」「燕の行かひしげき汐干哉 粟津 沂風」「花守の宿も桜の木の間哉 同」蝶夢文通二月九日出、沂風三月十日出が八月十二日に来た。(廿四日)「二燈に照す世界や盆の月 濶路」(廿六日)杜栄亭で探題、「星を見る稽古に更て夜寒哉 水」「綿引に白雲飛で雁の声 同」(廿七日)善光寺上棟の祭に参詣する。露敬・秋江両婦投宿して歌仙興行。探題、「夕顔の花見た宿に砧かな 水」(廿八日)中条(現、甲府市)の如練来訪、「楽しみの色も替らず松の琴 如練」「膝さしよせて語る漸寒 水」(九月三日)六和亭に休息。「つなの姥に尋む月こよひ 六和」「旅僧のひく杖しばし稲の花 同」(四日)田中へまかる。(七日)「聞馴し我さへ淋し鹿の声 春沢」(八日)許白ぬしの武江に帰るを送る。「けふも山翌も山路の紅葉哉 水」(九日)「骨折を見る人ぞ菊の畠 水」(十二日)「名月や入相のかねに驚かず 松亭」(十三日)願はくばちどりの聞たし後の月 水」今夜路杏亭で瑚石送別の会興行。(廿日)「香につれてしたふ軒端や菊の主 白起」「うすきしとねにしのご下冷 水」(廿四日)うかひ山下嶺南窓の菊に題して、「朝夕に御法の露や菊畠 水」(廿六日)秋懐旧といふころを、「下冷やしとねもむかし忍ぶずり 水」此の句は上条義冬ぬしへ贈る。(廿八日)北廓の御会にもう

でる。(晦日) 瑚石送別会興行。

(十月朔日)「山鳥のしだり尾重き時雨哉 氷」一斗坊武江へ赴くを送る狂句「神々のしり馬に乗れ旅衣 氷」(三日) 朝夕の箒めもなし神の留主 求鳳「(四日) 四竹楼にて歌仙興行、夜座。(五日) 達磨忌、無功信と百味を止て納豆哉 氷」(六日) 音書、「ひとつ家もうしろに向て案山子哉 霜後」「葉雫のはらく雨や渡る雁 同」「初汐や札立て置俄道 同」(八日) うかひ山に遊ぶ。(十二日)「一木立つ松に宿かる花野哉 曙白」「こがらしや研出したる星の朝 同」。「祖翁忌、老後の楽しみをしへ玉へる仰げばいよく高し、芭蕉忌や杖に白髪の客の数 氷」(十六日) 春夕老父を悼、「御影講の明る日蓮の枯葉哉 氷」去十四日物故のよし聞及んで申贈る。(廿四日) うかひ山会、題千鳥「小夜更て星より多し啼千鳥 氷」(廿六日)「木守の梯子あはれなり初しぐれ 蔵原浮木」「炉開やつると下る蜘蛛 同」(廿七日) 山梨岡神官止孝亭に、祖翁画像開の会に招れて、笠は長途の雨に結び、紙子は泊々のあらしにもめたりと口すさび玉ひし旅姿仰げばいよく尊し、「表具には旅にもまれし紙子哉 氷」「囲炉裏開てなら茶たく宿止孝」五十韻興行。(廿八日) うかひ山へ行。(晦日) 音書、「起て見て寝る分別や雪の朝 乱竿」「裾わけの音も聞ゆる納豆哉 同」「名所見た笠を休めて時雨哉 瑚石」

(十一月三日より) 府下に吟行、五日夕陽掃庵。(十一日) 翠柏園で女の客を招いた、亭の主に代りて、「炭焚ていざあたためん花衣桁 氷」(十三日) 人里の見えても遠き枯野哉 自原甫秋「十六夜や翌からは雨降らばふれ 同」。音書、「陸奥の果にやさしき千鳥哉 南浦」「人音の室漕ぬけて千鳥哉 米珠」「重陽、花も綿着てさむしろや菊の庵秀外」「関の戸は流石に閉てけふの月 同」。(十四日)「金屏の繕ひ出来て後の月 柳美」(廿日) 越中文路来訪、発句所望。ちどりの句を認め与える。丹後田辺の消息、「土筆嫁菜芥葉も動く小川哉 木越」「かやり火と物思ふ夜の一人かな 同」「谷川や泡に流るゝ春の水 桑五」(廿一日) 杜栄亭でおのゝ探題「永春の箕に掃入るゝ霰哉 氷」

(廿二日)夕顔や覗いて見れば人の家 松秀 (廿四日)うかひ山会にて、「夏ほしき物と見て居る氷哉 氷」。(廿五日)「戸を叩く客頼もしや夜の雪 氷」「かゝれとて閉こもりけり庵の雪 同」(廿六日) 武江音書、「山吹や流れに拾ふ小盃 雨柳」「雀子や飛習せて枸杞の垣 同」「河舟の綱を渡るやみそさゝる 岱儿」「吹ば散るものの積りて雪の竹 瑚石」「日当りに寝て居る牛や大根引 同」(廿七日) 杜榮亭で探題「薄日宿して春の心や年木こり 氷」

(十二月二日)夜分百染上人・元齋入来して春興工案する。(六日) 旧鴉ぬし東海道を経て武江に赴るゝを送る、「箱根越えてまた一つあり年の坂 氷」。(十三日) 紫清君武江に帰玉ふを送る、「春へ越す名もよき鶴の郡哉 氷」「雪解待るゝ杖の音信 紫清」「払ふても尽ぬ別や笠の雪 企」。「朝暎子を送る。手を分かつては川霧立わたりて忽万里を隔るはと覚ゆ。吾子青雲の志を励まし玉へ。やつがれ山居の情を養て再会を待たんに、天涯比隣のごとしとかやいひつつかいやり侍る。行く年も来る春も何遠からず 氷」。花泉婦人を送る。「春近き旅よそほひや柳髪 氷」(十六日) 文通、「柴の戸や馴し水鶏の啼夕べ 信州飯田 風古庵」「徒に夜ぞのこりけり後の月 同」(十八日)「気の付ぬうちに盛りや年の梅 万候」「鶯や初音に拂ふ竹の霜 同」。(廿二日) 田中泊。探題、「菜花や西の禿は遠歩行 氷」「花の後玉見付たり初茄子 雨洗」「株にもならで尊き菖蒲哉 同」「餅搗や幾代伝はる楠の白 氷」

以上は、天明五年の敲氷の俳諧活動を、坐右稿や草稿類を検討し整理したものであるが、平橋庵で催された月次会については当然のこととして省略した。なおその外に「天明五乙巳年初陽、臨時会草稿、於平橋庵興行」とある七十二丁の冊子が在る。これも敲氷を指導者として催されているので、その俳諧活動に加えるべき資料である。その概要を次に例記する。

人日歌仙―路香・平橋・旧鴉・春夕・杜榮・花青興行。正月廿五日法楽半歌仙―紫明・松秀・花青・敲氷興行。二月廿三日兔秀上人十三回忌表六章―敲氷・花青・曲肘・元齋・曙白・執筆興行念香。上巳三吟歌仙―杜榮・平橋・花青

興行。三月十一日歌仙―杜栄・平橋・花青・旧鴉興行。三月十七日歌仙―亀泉・敲氷・夜涼・文川・朝鴉・花青興行。探題「木枯の吹かと思ふ茶摘哉 氷」四月十三日半歌仙―雅路・平橋・花青興行。初夏十六日半歌仙―鯉尺・求己・敲氷興行。六月廿日歌仙―「松風を二夏友なり夕すゞみ 潤路」―「岩根の清水汲で住庵 氷」を発句、脇として瑚石・杜栄・花青の五吟。六月廿三日十二章―可候・敲氷両吟。七月六日十二章―仙歩・川長・北馬・白眉・平橋興行。七月十七日歌仙―杜栄・平橋・瑚石興行。七月十八日十二章―百花亭の雅兄東武へ赴き玉ふを見送りて、夜涼・蚊雷・平橋・花青興行。七月廿五日歌仙―瑚石・平橋・杜栄の三吟。七月廿八日半歌仙―秋江・平橋・元齋・曙白の四吟。同日夜座歌仙興行―露敬・平橋・除来・路杏・杜栄・花青六吟。九月晦日瑚石送別歌仙―杜栄・瑚石・平橋・花青・除来・路杏・春夕・旧鴉の八吟。十一月十四日歌仙―仙歩・平橋・阿東・川長・白眉・北馬・花青の七吟。十一月十六日芙蓉・平橋の十二章。十一月廿三日芙蓉・平橋の両吟歌仙興行。十一月廿八日夜半歌仙―杜栄・平橋・花青の三吟。十二月七日歌仙―芙蓉・花青・春夕の三吟。十二月九日夜首尾吟―芙蓉・花青の両吟。十二月十四日半歌仙―三車・花青・平橋の三吟。十二月十六日歌仙興行―麗山・仙歩・平橋・白尾・白羊・春夕・川長・花青八吟。十二月廿三日三車・花青の十二章興行である。

## 二、敲氷の俳諧活動についての考察

### (一) 俳諧活動の諸相

天明五年の敲氷の俳諧活動を大別すると、平橋庵において催された活動とそれ以外において催された活動とに分類することができる。月毎に催された定会は、「坐右稿」には一月十二日だけが記載されているが、二月以降は省略さ

れていると見てよい。宗匠にとっては最も重要な指導の場であるから、ゆるがせにできないはずである。「臨時会草稿」には、「於平橋庵興行」と記されているので、それは定会につく重要な指導の場と考えて記録に留めたものであろう。「臨時会」は廿六日にわたって催され、一日二回興行された日が二日ある。歌仙十四、半歌仙六、十二章五、表六章二、首尾吟一となっており、同夜当座の発句も記されている。更に「坐右稿」には平橋庵で興行されたものとして、訪れた門弟を迎えて指導したり、送別のために興行されたものが十一を数える。例えば、入来した松秀らと共に歌仙興行（二月廿五日）、同じように亀泉と歌仙興行（三月十七日）、求己・鯉尺来訪歌仙一折（四月十六日）といった具合である。

以上に記した平橋庵での興行をまとめると、平橋庵定会十二日、臨時会二十六日、「坐右稿」に見える平橋庵興行十一日、總計四十九日となるが、重複して行われた記載が四日あるので、実数は四十五日となる。

一方、敲氷が庵を出て門弟らと俳諧興行をした日数を見ると、飯田官舎（一月廿二・廿三日）、府下相川亭（三月廿四日）、府下にまかる（五月十九日―廿二日）（十一月三日―五日）、北廓へまかり泊（六月廿五日―廿六日）（八月四日―五日）北廓君の月見会（八月十三日・十四日）北廓御会（九月廿七日）、うかひ山定会（一月廿四日）うかひ山下嶺南窓会（三月朔日）（三月十八日）（四月十七日）（五月十九日）（九月廿四日）（十月八日）（十月廿四日）、田中へまかる（五月二日）（五月廿三日―廿五日）（九月四日）（十二月廿二日）、杜栄亭・四竹樓にて（八月廿六日）（十月四日）（十一月廿七日）、山梨岡神官正孝亭（十月廿七日）、これらの日数を合計すると三十四日となる。これら日には俳諧興行（多くは歌仙）が興行されたと見てよいであろう。平橋庵内外で俳諧興行指導のなされた総日数は、七十四日をくだらないであろう。このことは一年間の五分の一を俳諧指導についやしたということになる。また、「坐右稿」を中心に、天明五年中に敲氷の作った発句を集計すると、総句数一〇六句となる。「坐右稿」には門弟友人



の文通による発句も丹念に記されているが、門弟たちが平橋庵を訪れ、指導を得るために持参した句も綿密に載せられている。その句数は二〇〇句以上である。その指導の実態は不明であるが、相当な指導時間を当てたものと思われる。

## (二) 指導の態度の片鱗

天明五年一月十二日に催された、平橋庵定会の百韻興行の草稿を見ると、発句は「鶯や解けた湖水の縁伝ひ 抱山字門瑟」脇は「旭の登る柳幾本 平橋」で二十九吟である。敲氷は師門瑟の発句を掲げ、脇起こしの百韻を興行したのである。それだけでなく、この草稿には「抱山字評」と記され、優れた作者として、元齋十八点、止孝十五点、何鳥十三点と門瑟が加点している。敲氷は師の発句を得て興行しただけでなく、平橋庵主として指導した百韻を直接師自らに加点を乞うているのである。同年二月二十七日に平橋庵で興行された「落葉の巻」(草稿)は連衆、百朶・平橋ら十二人で催したものであるが、如雪庵評と記され、天は花青、地は曲肘、人は百朶となっている。如雪庵は俳号尺五と言ひ、浮亀庵卷阿の高弟である。卷阿は門瑟と共に守黒庵柳居の高弟であるから、尺五は敲氷と守黒庵柳居系の同門であり、明和八年冬には、甲府上府中相川近き所に如雪庵を構えた宗匠である。そういう同門の人々とも相携えて、作品を評価してもらい向上を目掛ける姿勢に心ひかれるものがある。同年八月十二日の平橋庵定会の百韻は、発句が「駒牽やはるばる来たる木曾の蠅 平橋」、脇が「月すみやかに走井の影 閑水」で十七吟であった。その草稿にも尺五評とあり、琴雪二十五点、平橋二十四点、曲肘二十点と記されている。厳しい公平な評価を目ざしている敲氷の真摯な心を感じる。

## (三) 「月次五題句合 花青」をめぐる、

「天明五巳年、月次五題句合、花青」と表紙に記された十七丁の草稿がある。月毎に五句出題し、その題で発句を

吟じ、出された句を評価し、作の優劣を競ったようである。例えば正月には、福寿草・七くさ・柳・霞・春雨が出題され、それらの題の発句を作って出し、その中から優れた点を得た人を選んで発表するといった仕組みのようである。勝・二・三の三級に分けられている。この年の正月の五題句合では、勝は杜栄（注、女性俳人）二は百朶、三は曲肘であった。一月から十一月まで催され、七月・八月には三に同点者が二人ずつあった。すなわち七月の三は夜涼と鉢石であり、八月の三は瓢箪と五原であった。判者は敲水であったのか、それとも別人であったのか、記録がないので判断しかねる。参加した連中は平橋庵門下が多い。ところでこの草稿の表紙に記されている花青は月次五題句合の催主である。敲水の長男であり、天明七年（一七八七）五月三日三十八歳で没している。逆算すると延享三年（一七三〇）生まれである。敲水がまだ鳥我を俳号としていた時代、明和六年（一七六九）の「己丑のとし初懐紙」に年抄として、「一子なるものになりはひの事打ちまかせて世の外に遊ばんとするもおかしくて、足ることを知らず済すや年の暮」と吟じているが、この時長男の花青は十九歳であり、前書にある一子であつて、家業の農業をまかせられたのである。といつても父敲水の影響と指導のもとに、父の歳旦帳に句を寄せていた。安永七年（一七七八）には、妻（注、翠袖）と共に平橋庵の月次会や芭蕉忌法筵に参加している。安永八年二月朔日には敲水の次男長瓜の「獨活掘る人芳しき山路哉」を発句とし、敲水・杜栄・翠袖・花青の五吟半歌仙が興行され、同年二月晦日にも、除来・杜栄・長斧に敲水の家族四人が参加した十八章が興行されるといった具合に、殆ど家族ぐるみで俳諧に打ち込むようになった。そして安永八年には、八月・十月・十一月に催された「平橋庵評月次五題句合」（草稿）が残されている。続いて安永九年にも、平橋庵評月並五題句合が、正月・二月・三月・四月・五月・六月・十月に催され、朱点のある草稿が残されている。花青の句も安永八・九年月次五題句合を見ると佳吟が目に付く。

初潮や迷うて歩行く鶴の声 花青

古大根かこふあたりや帰り花 同

梅が香や氷柱のしづく夜もすがら 同

天明五年の「月次五題句合」は、相当に力を持つに至った花青が催主となり、万事を取り仕切り、選評に敲氷の意見を叩くという状態であったのだろう。平橋庵に学ぶ俳人たちは、敲氷とその助手花青の助力によって、連句と発句とを併せて習得することができたと言えよう。

## 天明六年（一七八六）五十五歳

### 一、俳諧活動の実態

この年の敲氷の俳諧活動も「坐右稿第二」と「坐右稿第二」によって、概観することができる。

（元日）閑居試筆として「藜の実喰摘にせん草の庵」と吟じた。喰摘とは江戸で蓬萊節を指す。藜は若い葉や実を食用とし、その莖を乾燥して杖とする。実が食用になると言っても、何か乏しい感じが着きまとう。そういう藜の実を蓬萊節とすると言うのであるから、貧しい生活が想像され、貧困の生活に耐えて生きようとする心構えが推察される。

（二日）春興、「老木とてうとまれもせで梅の花 氷」「油断して若木は遅し梅の花 同」「うぐひす細脛強し雪の中 同」これらの句には、五十五歳という老を迎えた敲氷の若者たちにも軽侮されず俳諧活動を持続しようとする氣持ちがにじみ出ている。（七日）人日、「常々は人に知られぬ齋かな 氷」「作らねど種の絶せぬ齋哉 氷」。（九日）今夜

余寒甚し、近き連衆会して歌仙興行。おのく探題。「芹摘や田舟に棹をさして行 氷」(十日)庵主留守なりければ「青柳に門叩かせて御慶哉 朝道」。江都芝都院より臘月末の文通来る。去年冬、餞別に「行年や来る春も実遠からず 氷」と敲氷の吟じた句を発句とし、「うらなくかほる早咲の梅 都院」と脇などして送って来る。(十二日)定会初席。「梅が香や朝日くり出す綱渡し 葛浦大隠」を立句として、「するどき声も憎からぬ雉子 氷」、「獨活煎喰うて山居の我まゝに 茂林」など、脇起百韻興行。連衆十八人。平橋・茂林・元齋・李道・百童・杜栄・如翠・慈鳥・山鶏・龜六・尋古・竹翁・素竹・鬼孫・勇起・眉長・止孝・童歳。兼題は若草で「若草や冬買置し古俵 氷」。音書、「うっかりと起きて笑ふや春の雪 五原」。(十七日)越後から音書、十一月廿六日発が今日到来する。「宿入の小荷駄さわがし夕時雨 越後秀外」「木枯や田面に鶴の踏こたえ 同」「達磨忌やひとり米踏む水車 同」。武江音書に「袖ひぢて草も結ぶや若菜摘 南浦」、「鶯や鄙ぶり歌のまゝながら 同」「ぬるむかど堀かねの井を覗きけり 松亭」「春十日立や雪解の隈田川 同」。(十八日)紅白園においておのく探題、社頭柳で「宮ばしら太しき中に糸柳 氷」(十九日)「やゝ春を引伸したる柳哉 雅量」(廿日)「春雨や飴売りひとり二王門 濶路」「路次笠へ松の雫や春の雪 同」「むら消えの雪に直路や臈月 同」府下連中五客来訪し歌仙を興行する。探題に「声遣ふ人は出歩行余寒哉 氷」挨拶の吟、「もるゝ香をしたひあてたり庵の梅 鳩道」「雪に埋みて春しらぬ里 氷」、「梅が香につもる客あり片折戸 調右」「茶の下たく去年の椎柴 氷」。(廿二日)「人の手の届かぬもよし初桜 秋江」「岸の雪吹ちる跡に雲雀哉 紫明」(廿三日)四竹樓に会しておのく探題、寄椿祝で「八千代経て今は若木の椿哉 氷」(廿四日)うかひ山初会。題燕、「海の上来て旅疲の乙鳥哉 氷」(廿五日)申刻雪降る。麓には猿かしましや朝霞 キ明」「雉子鳴や片下りなる畑の啼 同」「散るまでも直ぐとはみへぬ椿かな 同」「下もえや箒木の跡に風情有 台原台琅」「春雨の晴て浮世も胡蝶哉 珠翠」(廿九日)「風の烟潜るや岸の糸柳 裂若如水」「一葉ずつ春を見せけり梅の花 同」節分の題で「一粒

に腰の重さやとしの豆 同「梅一木よかれあしかれ谷の庵 水」

(二月朔日)「雲となり雪と成たる桜哉 柴車」「東風吹や思はず早き繩手道 鳩道」(二日)駿河から文通、「雲雀なく中にままく盛哉 春潮」。四竹樓にて灸治の会、連衆は亀六・杜栄・平橋・亀孫。探題に偶来松樹下を得て「我が来るを待ちしか松の下蔭 水」。(三日)「雪の日や世はさまざまの人通 青鳥」(五日)府下来雪園を訪ふ。昨夜武江から帰ったよし。「真帆にみせ片帆にみせて柳哉 松亭」「山城の矢倉は高し几巾いかのぼり 白桂」(六日)文通、「足洗ふ真水も細き汐干哉 都院」「花落ちて枝のゆれたる椿哉 同」(七日)郡内大嵐という処の天満宮奉納巻軸勸進に、「書初を納に参る宮居哉 水」。百董齋あるじの文通に、「若かりし頃より細字を好む一癖あり、幸に今年も眼鏡を頼み侍らず。」とあつて「米に近き八十の吉書始哉 駒井百董齋和秀」(八日)初午。「初午や子供に交る尉と姥 水」夜四竹樓で歌仙を興行する。(九日)駿陽清水みなと問丸山本氏の婚嫁を賀して贈る、「相生の松たのもしや若みどり 水」。(十一日)如雪庵のあるじ(尺五)が草庵に一宿して歌仙興行後、涅槃・彼岸を題として吟じた。「肌脱し参り人はなき涅槃哉 尺五」。「施しに漕ぐや彼岸の渡し守 同」「樟脳の香にむせびけり涅槃像 水」「宮守はぶ沙汰にくらす彼岸哉」。(十六日)「家づとに虚を語らん初ざくら 起千」。(十七日)筑路ぬしより、「梅咲やまだ鶯の口解かず」という句を贈られて「鶯の声たしなむぞ頼母しき」。また、筑路の老父が去年九月長逝したのに句を乞われ、「をしまれて名を残しけり菊の霜 水」を贈った。(十八日)鴨路の父が没した由を出羽の国から告げて来た由を聞いて「袖ぬれる種や雪解に雁の文 水」。(廿日)君山が涅槃会の連夜に身まかったので、七日に当たる今日「手向にも実や念珠の玉椿 水」と吟じた。(廿一日)聞朝の訃報に接して「聞朝子世にいまそかりしほどは、風雅に心せちにして、怠らず又はやりかならず、友どち会すること、壁にもたれ居眠る人をいきどほり申されしも、今は昔物語りとなりぬ」。「探り題楯に書かん春の雨 水」と追懐一入であった。打ち続く門弟やその親の死は、既に老を感じている敲水に沈

痛な思いを与えたに違いない。(廿二日)「梅が香やぬくめて運ぶ朝日影 谷村米賀」(廿四日)「うかひ山の御寺にか  
 の鶺鴒の霊の六百年の遠忌に詣でて、かの岸や鶺鴒も紫の雲に入 水」(廿五日)「笛川舎の会に聖廟法楽探題卓とい  
 のを得て」卓の絵もけふは松梅さくら哉 水」(廿六日)「いつも井のぬるみ加減や種ひたし 麻丸」(晦日)「書音。  
 丙子早春口号、「いにしへ惟然坊ばせを翁の句を鉢たたきの唱歌にしてうたひける事を思ひ出て、「いざ子供翁の  
 句々を手鞠唄 抱山」「梅さくや軒を見めぐる干菜寺 同」「うぐひすや起れば餘所の藪へ行 乱竿」「若草や井戸ば  
 かり有明やしき 同」「麦を踏仙人もあり桃の花 同」  
 (三月朔日)「平坡が女子出生の初の佳節を賀して」三千歳の花さく宿にひるな哉 水」「窓へ笑ひの高き山々 平坡」  
 (三日)「紙轂や新しからず古からず 水」(五日)「文通」鶯や関守聞て笑ひ顔 大坂門野」(六日)「雛の袖えならぬ桃  
 の匂ひ哉 松青」「草の戸へ錦の袖や雛の君 女梅兄」(七日)「埃捨の埃もいとほぬ柳哉 春沢」(八日)「優香が歌枕  
 見ようと吉野に赴く由を告げ、冊子の初に筆染よと乞われて、「鶯の笠と述たり旅出哉 水」(十日)「北山何がし和尚  
 の北堂の死を聞いて「春も猶佛寒き紙子哉 水」(十一日)「信州飯田の在南原の知足が妙義参詣の帰途来訪短冊所望。  
 「枝高き梅がかを乞ふ蝶々哉 南信知足」(十二日)「雨晴て椿流るゝ川辺哉 願訪自徳」「白魚の藻にからまりて流れけ  
 り 同」。(十三日)「紅白園の花見にまかりて、「散らばいざ丸けて置ん庭の花 水」(十五日)「文通、「春風にはやと  
 け初て桜飴 各桃」(十六日)「菩提山奉納巻軸に「護摩にたく木の尽もせぬ弥生山 水」菩提山は現春日居村の鎮目  
 にある長谷寺である。(十七日)「弄花小篇の巻軸に「神代から斯く有けるか山櫻 水」(十八日)「岩泉山大悲閣に登  
 りて、「かすむ日や見下す谷も真如海 水」(十九日)「盃の中にもさくらさくら哉 仙斧」(廿四日)「うかひ山下嶺南  
 窓にて、題永日、「永日や七野廻りて一首ずつ 水」(廿五日)「文通(去年六月十日の消息今日到来)「葭雀や声の中  
 行一日路 卷阿」。「押合うて秋の行衛や荻の音 静寿」。「うら枯や見て行道も定らず 同」。「うっかりと咲いた日向や

帰り花 同「鉢の子に一つかみほど丸雪哉 同」静壽が表徳を阿蔵としたき由を申し来る。文通「雲に倦て麦畑に入るひばり哉 米珠」「昨日来た人へ手紙や初ざくら 同」「遠近に蛙啼き立つ野中哉 同」(廿七日) 功成り名遂げて身退き世にはだしもたない布袋のあるじの落飾をほぎ贈る、「露くむ船の遊びや塵の外 水」(廿九日) 六和亭を尋ねける折節物語に、「真中に柳は烟る二瀬川 六和」「洗濯に連れ立つ里や桃の花 同」「曙の夢失ひぬ雉子の声 同」  
「山吹や下行船に肘まくら 同」

(四月朔日)「老僧の人なみくに膾哉 水」「木鉢の切味見ばや更衣 水」「新茶の酔を覚す縁先 鬼孫」紅白園で歌仙を興行する。(二日)「猿すべり散までは啼け時鳥 水」(三日)「入らぬぞと紙子投たり更衣 竹翁」(四日)「雪折の疵口癒て若菜哉 水」(五日) 臨川亭主人の池魚の禍の後新築し、青囊の収め所薬園のたたずまいが心こもるように見えたので「袖垣に香を包みけり紫蘇薄荷 水」、川口御社(現、河口湖町河口の富士浅間明神であろう) 奉納巻軸に「神垣や清きがうへに青簾 水」(八日) 飯田其扇亭に遊びて「産衣もまだ蚕也仏生会 水」「卯花や咲かできへ夜の明安き 同」。(十日) 八日九日飯田に吟行して今夕帰る。六和物故。「居士のなき跡に机辺に残りしものを見侍るに簪策一管・発句の草稿・からうた詠ぜし反故・石印の外に更に塵めくものなかりしに、かずくの志今なほゆかしくて」、  
「茶さじや昨日のむかし物語 水」 敲水の無常観は段々に強化されていくように思われる。(十二日)「万歳の膾を喉や戻り旅 濁路」「藤棚のゆかりや池の杜若 同」「うそ寒き袂のうちや更衣 長瓜」(十四日) 養老園主泊り、哥仙興行。後探題で「広沢に月見ぬ夜半の螢哉 水」(十七日) 竹雲法体し全休法師と呼ぶ。大師村(現、甲西町) 松雲院に閑居する。「この度消息の返しに申贈る、「抹香に石うす挽も夏行哉 水」。文通、「時鳥待たぬ鳥の啼きにけり 伊勢瓢醉」「鶏呵る女の声や五月晴 同」「雨蛙啼や樽の其の梢 瓜筋」(十八日) 不動尊奉納巻軸、荊沢連中勸進に「涼しさは慈悲の怒りや瀧の音 水」「塵払ふ迄なり旅の更衣 万候」「呼ぶうちち四五丁行や初松魚 万

候」。(廿日)「川風をうつつに聞や合歡の花 其扇」若鮎やせみの小川のさゝ濁 同(廿一日)素光ぬしが文台弘  
めの賀筵に贈る「花も実も兼て卯月の櫻哉 水」(廿二日)「山賤になくて口をし初ざくら 武江俗儿」(廿三日)「梅  
がかや麦わら屋根のかはく音 湖南信業素長」鴛や日を啼き伸し〜 同「冬川やうき州の岩の幾所 同」「麓には  
雨も交りて雪吹哉 同」「荒海を静にうづむ霞哉 同所去老」鴛や背研ぐ留主の小柴垣 同「杜宇雨夜の月の木の間  
より 古尺」(廿五日)「置直す石の軽さよ更衣 麻丸」昨廿四日嶺南窓会にて、おの〜麦秋「麦林やいづくもおな  
じ塵埃 水」(晦日)守黒忌法筵今月興行、「橋にむかしの色紙匂ひけり 水」

(五月朔日)北国より文通、「蓬萊や庭の小松も山つゞき 越後秀外」鴻の居る屋根の高さよ臙月 同「埋火や月を  
見て来て掻きさがし 同」藪人や姉には会はぬ琴の瓜 越後鍊石「うるさがる野牛の顔に胡蝶哉 同」待もせぬ杣  
へ初音や郭公 武江南浦。(二日)「此橋の名もくらからぬほたる哉 露敬」を笈句とし「刈りて真菰に草深き道  
水」と続けて歌仙興行する。各々探題に「鹿子結ふ手にはおそろし笹粽 水」小夜更けて火の青うなるうぶね哉  
同。「仙竹ぬしは生涯李白の一斗を信して盧同の七碗にはうとかりしも、今はむかし語りと成ぬ。」極楽の盆は蓮の  
浮葉哉 水(五日)「長々と衣桁に懸る菖蒲哉 水」山古ぬしの子が初めて立た幟を賀して贈る。「長く見ん幟の染  
に生の松 水」(六日)紅白園で百韻興行。(九日)河内国南楠葉不白の甲府官舎に逗留するを訪ね、歌仙興行して終  
夜談話。「やつがれ三年の先、淀のわたり吟行し侍りしを、まめやかに宿かしてもなされし事など謝して物語尽せず。  
「葉ざくらの比もかたみのみのや嘸 水」音信て旅寐の窓に水鶏哉 不白(十日)高山山浄徳寺で百韻興行。(十二  
日)「雛立て女に老はなかりけり 雅重」呼次ぎをせめてふりむけ帰る雁 河内国不白。「しばし見ん又と成るみのう  
ら霞 同」(十七日)「破れ橋の朽せて光る螢哉 亀石」(十八日)より廿日まで田中に遊ぶ。探題、「早乙女や柳に  
恥て松の下 水」(廿二日)信州柏木草々庵柏卓来訪。「いせいある筍見たり数十本 柏卓」木下の間に人訪ぬ宿



水」「柏木村は諏訪道中金沢より半里北に候よし、同伴の人柏屋長右衛門、柏阜は佐渡の産にて五・六年來柏木に卜居のよし。草庵のあるじはうばそくならねど、三峰もうでのかへさなりとて、予が草の戸叩れけるに」、「すゝかけの花ふみわけて夏野哉 氷」「けふも又五月雨ならめ朝の虹 柏阜」(廿三日) 諏訪二時庵文通、「木曾路来て若葉の闇を見付たり 自徳」(廿四日) うかひ山会。駿河の檜露の裏富士にも百草を求めんと来りて、笛川舎を主とするに對面する。一日「五月雨やいざ生花の草合せ 氷」と申し贈る。元齋の案内で敲氷に面会し、「今耳を洗うて聞かんはととぎす 木屐居檜露」。(廿六日)「滝の音聞く五月雨の晴間哉 四目市以中」「山寺は雲のいづこそ五月雨 同」(廿七日)「筵戸の野守が門に水鶏哉 松亭」「五月雨や裏迄しみる竹瓦 同」(廿九日)「行春やけふも翌日もと神もうで秋江」「うの花や明行方へ神もうで 同」。

(六月朔日)「蓋明けてくやしき顔や氷室守 氷」三車逗留、「雪もあり朽葉もありて氷室哉 三車」(二日) 三車逗留、首尾吟興行。「山路来て茅萱刈しく清水哉 三車」「声も出さねど鹿の子淋しき 氷」(四日) 山梨岡に遊ぶ。納涼の題を得て「松買に来て日を暮す納涼かな 氷」(六日) 柳儿から文通、「既に斧あてんと見れば木芽哉 柳儿」檜露ぬしの卜居しけるを賀して贈る、「能隣有て汲しる清水哉 氷」(八日) 都院文通、「五月雨や濁らぬものは堀井のみ 都院」「岸伝ふ鯉に動くや花かつみ 同」「風低し植て程なき小田の色 同」(十日) 文通、「爺婆の中に臼あり春の雨 乱竿」「宿引に戻れくと水鶏哉 同」(十一日)「いつか夜は明て居る也五月雨 青鳥」(十二日)「楠の木の臼を井筒に清水哉 氷」(十三日) 青鳥ぬしの除目を賀して「撰ばれてうつし植けり竹の苗 氷」(十五日) 飯田に吟行して十七日に帰庵。停雲閣に遊んで各々題暑。「暑き日や誰にも逢ぬ長繩手 氷」「覗き歩行隣も同じ暑さ哉 好風」(十七日) 来雪庵で引蝶に對面する。このほどの吟「五月雨や畠にも夏草の花 引蝶」。其扇亭で鉢植の蘇鉄画賛霏に応じて、「昼寝していざ鉢の木の下涼み 氷」。(廿日) 南浦文通、「こもりくの初瀬を果や夏木立 南浦」「薪に

も板にもならで夏木立 米珠「帆柱に望む家あり夏木立 抱山」「若竹や主を問へば琴の音 大菊」「若竹や一本伐て月涼し 米珠」「鮎釣のつらぬく枝やこし竹 抱山」「廿二日」「時鳥声なをしみそもやの中 遠江柴里」「廿四日」うかひ山会、題蓮、「真中に御陵有て蓮の花 氷」「廿五日」逸見西井出(現、大泉村) 諏訪奉納「あつさしらでくらす氏子や氷餅 氷」「廿六日」文通、「涼しさや燈火もるゝ竹の奥 古尺」「氷室山梢は青しあすならう 浅江」「夕顔や我家見出す川向ひ 米珠」「廿八日」八代に行き一泊。

(七月朔日)「豆麩から滴垂りけり今朝の秋 氷」「二日」「唐黍や風はさながら萩の音 氷」この発句を平橋庵内会の立句として山鶏が脇を付け、連衆十八吟で百韻を興行し、葛浦老隱(門瑟)の評を乞うている。鬼孫廿五点、百朶廿四点、五考廿三点の成績であった。(三日)無端の新別荘に遊んで、「あゝ涼しいぎ七夕つめにかし座敷 氷」「五日)如臯亭に招かれ、船に時鳥の画に贊、「ふしみにも臥さで待けり杜宇 氷」「秋たつや捨た茅の輪もまだ青し同」「七日)「おもかげのかはらで幾世星の恋 氷」「十日)其扇ぬしの祖母の五十年忌のいとなみに、うかひ山で五十韻興行。(十四日)盆会、「たま棚や娑婆の百味は瓜なすび 氷」「十六日)笛吹川・平等川洪水。蠹自このあたり  
に雨やどりの折節で、雨が収まらず平橋庵に滞留した。「萩の香の奥ゆかしさよみのゝ露 氷」「日盛や瀧より上の蟬の声 蠹自」「十九日)「なぐさみに葉飲けり五月雨 石牙」「廿三日)文通、「爺婆の中に白あり春の雨 乱笋」「萍や透間を鳩のうき所 同」「廿四日)「縞売も越後へ帰れ今朝の秋 百童」「廿五日)「角力取のとらへそこなふ螢哉青鳥」「廿六日)求鳳ぬしが草津温泉に赴くを送る、「道々は嘸葉草の花盛 氷」「廿九日)小林紫明の除目を賀して贈る、「実を結ぶ時至たる接木哉 氷」。越後から文通、「垢ついた力石あり夏木立 嵐二」「先達の杖で分行若葉哉同」「釣台にしっとり重き牡丹哉 同」「見返りて戻る衛士あり青簾 鍊石」「夕良や雪隠さがす旅の宿 同」  
(八月朔日)「八朔や懸かはりたる酒ばやし 氷」「五日)井戸素餅亭にて「初雁を聞けとや萩の花筵 氷」「六日)

伊勢丹生乙艸文通「無造作に露も抓むや早苗取 乙艸」かゞよふて木の間に涼し常夜燈 同(七日)「精進をゆるす母あり盆の月 松亭」江の水にこよひは波の花火哉 起千(十二日) 初汐や岩の上には松の音 水(十四日) 美濃の国の行脚文中という桑門訪れる。(十五日)「行影は水より早しけふの月 水」を立句として、連衆七吟で歌仙興行。余興おのゝ探題。「初雁や砂にそここ跡ばかり 水(十六日)」「能う寝よと暁かけて春の雨 老翁徐水」此奥はまだ踏もみぬ花野哉 同「ほつほつと座禪の際に茶摘哉 同」「薄縁に身を投げてみる暑さかな 同」「月落し跡さまぐの花野哉 阿水」「名月や花野を狩で夜を明し 同」「名月や蟻の往来も昼の俛 僧 五雲(十七日)」「霧雨の雫に寒し松羅 潤路」「一夜く近寄る軒やきりぐす 同」「草の戸や暮待かねし虫の声 同(十八日)」「みる物に眼鏡外すやけふの月 柳美」「秋立や片荷は軽き茄子壳 同(十九日)」「名月や手水鉢這ふ蝸牛 松亭」「又起きて膝に寝る子やけふの月 同(廿二日) 差出の連中入来、歌仙興行。「読物の眠気覚しや鹿の声 柯東」「窓白妙に月影の雲 平橋(廿四日)」「とりすがる言葉の蔓や秋の草 三溪」「月にもうとき山陰の庵 水」呉月も入来して、三吟で首尾吟興行する。三溪・呉月の両子は郊外逍遙の折からさへ携えて平橋庵を訪れたのであった。訪れを謝した敲氷は「我が庵は花野にあらで草むしろ」と吟じた。(廿五日) 田中(現一宮町)の琴松下へ招かれて百韻興行をする。(廿七日)「名月や空にしられぬ銀世界 五考(廿九日) 梅賦の発句「山守に案内させてきのこ狩」に敲氷の脇「兎は草を走る夕月」で歌仙興行。當坐おのゝ菊花を題として「鳴子戸のかしがましきよ菊畠 水」(九月朔日) 鎮目(現、春日居町)の竹呂亭を訪い、牧笛庵東山下のあるじを訪い帰る。(二日) 何がし禅僧から扇子の絵に拂子と串が書かれているのに一句を望まれて、「月の夜や空裏を走る白鼠 水」今日善光寺に詣でて、夢山下古川氏松亭ぬしを訪いて帰る。(三日) 善光寺から夢山を越え、八幡宮に参詣する。(七日)「湖のゆれて水減る野分哉 水」。文通、「名月や眺め替たる水の面 南浦」「出代や櫛で占ふ心当 秀外」「御子良子の顔白々と紅葉哉

同「鍛冶も槌冷して門に涼み哉 同」「白雨や家鴨抱き込む背戸の口 鍊石」「楫立た門に客あり夕涼み 同」「九日」「白菊やよしあしをいふ人もなし 水」。(十一日)「色替ぬ松の栄や神代から 仙歩」(十二日)「みよし野に秋も住たき砧引 水」「水とくく」と誘ふ月影 山鶏」を発句・脇として定会興行。(十三日)月下の会を紅白園で興行。「葡萄酒の口切せばや後の月 水」(十四日)「鯖舟の着てさはがし後の月 長瓜」(十五日) 今日竹呂・求鳳東武から帰り来て、状届く。「うとかりし門にイむ燈籠哉 秀外」「実方も雀と遊ぶ花野哉 同」「朝霧や牛にせかるゝ丹波口 秀外」(十七日) 長沢天満宮奉納軸「吊柿や氏子さかしき御贖物 外」今日十七日元齋同伴で、柚の木へ赴く。三夜逗留。廿日夜に入て帰庵。三十年余りの年月を経て富発主に対面する。むかふ髪のおおえる事など思い出して、「手すさびのむかし語りや角力草 水」。岡氏楚山ぬしの許に遊び秋の景を詠ぶ。「千金に替ぬ夕べの紅葉哉 水」慈鳥ぬしを訪れては、「むさし野の種か軒場の本薄 水」「待ちもうけたる月と雁がね 慈鳥」と吟じ、十九日仙白ぬしの許では「打寄ればけふも節句よ菊と栗 水」と詠じた。柚の木の上「たいら」という処に夢想国師の旧跡があると聞いて訪れて、「樹石ものいはねど千載の俤まのあたり見えたり。観法の石包みけり萬紅葉 水」の句を得た。饞別には富発・慈鳥・仙白・松歳・五慈・春竹・楚山・亀童の好士八人の句があり、「又登る約束深し下り梁 元齋」「ふり返りくみねの紅葉哉 水」と別れを惜しんだ。(廿日) 柚木からの帰途、落葉庵に立ちよった。「秋風や夕日に牛の影法師 石牙」「名月や庭に來ている隣の子 同」(廿一日・廿二日) 養老園のあるじ濶路が杜栄亭に逗留し、歌仙二巻興行に参会する。(廿四日) うかひ山定会。おのおの暮秋、「行秋や鳥とも逢はぬ龍田越 水」。(廿六日)「あの猿を誰ぞしかれかし山桜 浮木」「名月やいよく白き池の水」「みの虫の簑脱で見よけふの月 同」老村ぬしを悼みて「きく命や昨日のむかし物語 水」

(十月朔日)「あすなるの木を驚かせ初しぐれ 水」「役士の袖打拂ふ落葉哉 水」。上の二句は先の日落合五民亭で

各探題の吟である。(二日) 山鶏の招きに応じて東西の諸好士が寄り集って一盃一興に秋のたけなわであるのも忘れ、猶明日も空しく過すまいとのことばを聞いて、「夜遊びも朝寝もまよ神の留主 氷」と吟じて歌仙興行。(三日) 山鶏のもとに会して、おのゝ探題、「獅子舞の田舎を歩行小春哉 氷(五日) 油川(現、甲府市)の冬山亭に会する。おのゝ初霜、「初霜や野を恋しがる架の鷹 氷(九日)「元日の心に似たりころもがえ 魚関」「散る時に見付出しけり柿の花 麻丸(十日)「逸見地名句合の巻の軸に一句をこはれて」「信濃路はよき隣也夕すゞみ 氷(十二日)「夕顔も秋はいろゝの瓢と成て姿のおかしみをあらはす。されど其のおかしき境の学び得がたければ、けふの御筵に観じ侍るとて」「はせを忌や是言の葉の種瓢 氷」「一碗の茶に遊ぶ口切 山鶏」の両吟に続けて五十音興行。(十四日)「名月や心にかゝる風もなし 梅兄」「後の月菅屋に寒きけぶり哉 同」。十四日から十七日まで城南を吟行する。「鉢植の茄子珍らしはつ時雨 氷」「明がたは矢橋へ帰る千鳥哉 同」「物かたく親子向き合ふこたつ哉 氷」「紙衣裁つ日によしあしはなかりけり 氷」「麦蒔や日のみじかさにも無人札 同」十八日から廿二日まで病氣。(廿三日)瓢藏の追善が長楽寺で興行された。五考が執事、忌日は七月廿三日。「良医何がし居士は病に臥すともなくて白雲郷に帰られしかば、日比のおもかげ目にさへぎりて、更になき人と思ひはなちやられぬ心地し侍るもいとかなし。」と前書して「手すさびも手向となりし火花哉 氷(廿四日) 川口の斗北から言いおこした不二浅間奉納、「八つの海静かに秋の祭かな 氷(廿五日)「塗桶に手ごたへのある夜寒哉 青鳥(廿六日)「すげなくも柳の動く小春哉 松亭(廿七日)「里からも思ひ出してはしぐれ哉 平柯」「久しぶりにて聞しさゝ啼 氷(廿八日) 越後文通、「數入や眠かりし月も冴返る 平柯」「糸遊や被にさはる風もなし 同」「海棠や梅見る寺の唐びさし 同」「山吹や墓の背中に花の塵 同」「けふは西翌は東や花の山 同」「翌は出る船の別や朧月 同」「刈跡の直路と成りぬ麻畑 同」「麻かりのててらも麻の手織哉 同」「骨折し青田眺めて門すゞみ 同(晦日) 廿七日から今日まで寒冷甚だし。庄木奉

納菊士・湖泉の需めに応じた。「小春にも牛の日ぞよき神詣 水」信州から文通、「鶯に炭挽ゆるむ日向哉 桂園」  
「花の道又神さびて若菜哉 同」「菅笠に松原の露やかんこ鳥 同」  
(閏十月朔日) 閏十月のころを「もののふに二度のかけあるいのこ哉 水」(三日) 眉山来訪、「年礼もぶさたの庵  
に小春哉 眉山」(八日) 風條法師独吟百韻を名月の発句で興行、敲水の評「独吟の百韻に夜座の静かなるは、観法  
の趣も同じこころ成べし。法の声と聞人ぞきく峰の鹿 水」。三州文通、「きくの日や露もはかなきものならず 石  
蘿」(十二日)「うるふ月のしるし也けりししぐれ 水」定会百韻興行。「法の道ひろひ初める十夜哉 五民」(十三  
日) 青鳥入来。「初雪や木履の道も苦にならず 青鳥」歌仙興行。(十七日) より西山下に吟行し侍りて廿六日帰庵、  
鬼孫同道。(十八日) 鴉路亭の新宅を訪ふ。兄弟である出羽の客から彼の地の物語を聞いて「雪の宿戸には羽黒の牛  
の札 水」(十九日) 松栄山(善応寺、青柳村にある)の先住上人の閑居で歌仙興行。「あるじ上人の閑居に遊びける  
に、高祖大士の御書の趣思ひ出て、冬籠り新米尅斗茶三升 水」「朝日をたもつ水仙の鉢 五原」。おのゝ初雪、  
「初雪や白きをみれば月の影 水」。(廿日) 鯉沢春耕亭にて、「千金の小春や二度の夷講 水」「はつ雪の朝珍らしき  
客 春耕」「平橋庵より夷講の一句を恵まれて、大黒に似て福々し丸頭巾 春耕」「ゆるす貢の俵積む宿 水」歌仙興  
行。若鮎画賛を一牙が所望するに答えて「若鮎や月も三五のかつら川 水」(廿三日・廿四日・廿五日) 荊沢(現、  
甲西町)逗留。市川(渭川)氏の世嗣なりける秀才子は、小学のいとまに風雅の志浅からぬに感じ侍りて「たのもし  
き梅のすはひや年の内 水」の句を贈る。「寒梅や寒さ忘るる日の恵み 渭川」「春を隣に賑はしき宿 水」に続けて  
歌仙興行。竹雫に涼月という表徳を与える。涼月は大師村(現、甲西町)の補陀山松雲院の住持で、「実真こころも  
涼し冬の月 竹雫更涼月」と吟じ、「老木の梅のさとき早咲 水」と敲水も称えた。更に敲水が涼月道人の住む松雲院  
に遊んで、「たゞ頼め冬至に近き軒の梅 水」と吟ずると、涼月は「法の力に寒さ忘るる 涼月」と応じている。更

に、初元結の年にも至らないで俳諧に志深い望月九知に感じて「鶯や冬から外の鳥に似ず 氷」と吟じ、この亭で神祇の竹という題を得て、「青竹の笛おもしろし里神楽 氷」と吟じた。(廿八日) 八王子花平文通、「衆坐する庭になく神馬哉 花平」「みのほしき草木の露や月こよひ 同」。

(十一月朔日)「神々を迎へてけふの冬至哉 氷」吟朝来訪する。「取すがる手もやはらかに紙子哉 吟朝」「埋火ぬるき庵の明暮 氷」(二日) 武州散田峰尾氏の北堂の禅尼が五月某日身まかった由を伝え聞いて申贈る。「あふち散る夕べくまなし雨の空 氷」(三日) 花輪漂麦ぬし来訪。「叩き割る氷や娑婆の水鏡 漂麦」「至冬にもまだ梅咲かぬ庵氷」朔旦冬至の吟として「生れ逢ふ世や朔日の冬至梅 同」(五日)「瀬戸物の膳立寒し後の月 甚化」「札懸て菊覗かする格子哉 同」。池楊が中冬五日霜の一句をみづから口にすさびて辞世と題して残した。その思い決めた志をみる人々は、悼むに詞なく袖を沾すのみであった。「霜よりも寒きは霜の一句哉 氷」と敲氷も追悼した。(九日) 風條老衲が、寮の再建新築した賀筵に招かれて「来るとしの暦も見する柱哉 氷」。歌仙興行の後、おのく探題に年木を得て、「山に居て月日もしらず年木こり」(十日) 仙斧ぬしの長子の初元結を寿て贈る「たくまじや家の継穂の冬至梅氷」。(十五日) 引蝶ぬしの東武よりの帰途、老師に対しての吟として示す。「むさし野やなつかしくみる冬の月 引蝶」「わづかに残るしもの古道 門瑟」当季、「みのむしや葉の散る跡に寒がらす 引蝶」(十六日)「老僧の寝て経をよむ寒さ哉 氷」(十八日) 文通、谷村陣屋木原栄蔵から、「深山路は行脚も急ぐ時雨哉 百敬」(廿日)「初雪を積らせて見ん鉢の松 蔵六」「山住学ぶ庵の冬枯 氷」歌仙興行。(廿三日)「日の足の有文走る枯野哉 氷」(廿四日) うかひ山会にて、「対立に梵字珍らし大師講 氷」「臘八や凡夫の朝寝にがくし 同」(廿五日)「何炊ぐ烟成らん雪の舟九皇更免吾」(廿八日)「初雪や茶の水汲にまはり道 杜栄」「寒くは見えぬ寒竹の垣 氷」歌仙興行。探題に「寒声に鼓が瀧へ通ひけり 氷」(廿九日)「片隅に熊の膽を干す檜火哉 阿吉」「干あへぬ藁やいのこの餅むしろ 同」「二声

もみなは聞せぬ杜宇 同。上の三句文通。

(十二月)(六日)文通、「夜すがらの松風や今朝初氷 東武許白。今夜針供養といふことを、「七夕の夜にさも似たり針供養 氷」(九日)「年も日も積りて寒しけふの雪 苔」(十一日)「白梅や月夜欺く花盛 花輪和秀」「継梅や花盗人も跡をさり 同」「水べにて月を飛越す蛙哉 同」「とく掃や鶏の巢もあらたまり 同」(十二日)平橋庵結会。兼題、年内立春。「年の内に春風立ちぬ餅の花 氷」長谷川氏五男の元服を賀して、「年の内男松のみどりたのもしき 氷」浮木老衲来訪、三百人の群侍し言葉書あり、「淡路しまいいつも千鳥のよぶ 浮木」「あれし閑屋に寒き月影 氷」春興「氷はまだ氷るくせあり臘月 浮木」(十六日)文通、「心よく寝る暁や庵の雪 古尺」(十七日)節分、黒駒から二客来訪。「幾筋も抜道ありて山桜 馬風」「有明も是には過じ夜の雪 百兎」「梅ならで鱗さしけり庵の門 氷」(十八日)「春雨の心地こそすれ年の内 氷」(廿三日)「世の中の塵にはそまね雪の袖 三機」(廿五日)「日の脚の有だけ走る枯野哉 松亭」「ふり捨て寝る人多し夜の雪 同」(廿七日)「真直な枝もありけり梅の花 門瑟」(廿八日)憂喜依人といふころを、「引越しはくらき事なし五月雨 氷」

## 二、俳諧活動についての考察

### (一) 俳諧活動の諸相

天明六年にも同五年と同様に、甲斐の国の外に出るような俳諧行脚を敲氷はしていない。平橋庵を留守にしたとしても、国内の門弟を訪れての俳諧指導で、十日間を過ぎたのが、最長期間にわたる行脚だった。従って俳諧指導活動の諸相は、殆ど天明六年と同様であった。



「坐右稿には月次の定会について、一月・九月・十月・閏十月の記事が記されているが、この外の月にも定会は厳しく催されたと思われる。十月十二日の定会は、芭蕉忌法筵となつてゐるから、その他の月次定会は総合で十二回催されたことになる。又、「坐右稿」に記録されている平橋庵で催された俳諧興行は、守黒忌・芭蕉翁忌を含めて十四回である。

- 1 一月廿日、府下連中五客来訪、歌仙興行。
- 2 二月十一日、尺五平橋庵に一宿し歌仙興行。
- 3 四月晦日、守黒忌法筵興行。
- 4 六月二日、三車上人逗留、首尾吟興行。
- 5 五月二日、露敬入来、歌仙興行、各々探題。
- 6 八月十五日、歌仙七吟興行、余興各々探題。
- 7 八月廿二日、差出連中入来、歌仙興行。
- 8 八月廿四日、三溪・呉月入来、歌仙興行。
- 9 八月廿九日、梅賦らと歌仙興行、当座菊。
- 10 十月二日、山鶏の招きで諸好士一盃、歌仙。
- 11 同、三日、二日に続き山鶏のもとで題小春。
- 12 十月十二日、芭蕉忌法筵五十韻興行。
- 13 閏十月十三日、青鳥入来、歌仙興行。
- 14 十一月廿日、葺六来訪、歌仙興行。

上の平橋庵での俳諧興行は、歌仙十回、五十韻一回、首尾吟一回、不明二回と言うことになり、月次定会も合せて、二十六日興行されたことになる。

敲氷が庵を出て恐らく求められて俳諧指導に赴いた日を、「坐右稿」から摘記すると次のようになる。

- 1 一月十八日、紅白園においておのおの探題。
- 2 同 廿三日、四竹樓に会して各探題。
- 3 同 廿四日、うかひ山初会、題燕。
- 4 二月二日、四竹樓に遊びて探題。
- 5 同 五日、府下来雪園を訪ふ。
- 6 同 八日、四竹樓にて歌仙興行。
- 7 同 廿五日、笛川舎において聖廟法楽の会。
- 8 三月十三日、紅白園の花見にまかりて。
- 9 同 廿四日、うかひ山下嶺南窓にて題日。
- 10 四月朔日、紅白園にて歌仙興行。
- 11 同 九日、朝道亭で探題。
- 12 同 八日・九日・十日、飯田に吟行。
- 13 同 十四日、養老園に泊り歌仙興行。
- 14 同 廿四日、嶺南窓会、各探題。
- 15 五月六日、紅白園で百韻興行。

- 16 同 七日、養老園に一宿し、松亭と帰る。
- 17 同 九日、河内国の不白と甲府官舎で歌仙。
- 18 同 十日、浄徳寺で百韻興行。
- 19 同 廿日、田中に遊び探題。
- 20 同 廿四日、うかひ山会、後、題田植。
- 21 六月四日、山梨岡（神社の神官正孝亭）に遊ぶ。
- 22 六月十五日より十七日まで、飯田吟行。（停雲閣・来雪庵・其扇亭などに遊ぶ）
- 23 六月廿四日、うかひ山会。
- 24 同 廿八日、八代に行き一宿する。
- 25 七月五日、如翠亭に招かれる。
- 26 八月五日、井戸素餅亭にて。
- 27 同 廿五日、田中琴松亭で百韻興行。
- 28 九月朔日、鎮目の竹呂亭・牧笛庵を訪ふ。
- 29 同 十三日、月下会を紅白園で興行。
- 30 同 十七日から廿日、元齋同道で柚の木へ赴。
- 31 同 廿一日・廿二日、養老園主と杜栄亭で歌仙二卷。
- 32 同 廿四日、うかひ山定会。
- 33 十月三日、油川の冬山亭に会する。

34 十月十四日から十七日まで城南に吟行する。

35 閏十月十七日、西山下に吟行。廿六日帰庵。(同十九日、松栄山先住上人の閑居で歌仙興行。同廿日、歟沢の春耕亭で歌仙興行。廿三日・廿四日・廿五日荊沢逗留。市川渭川亭で歌仙興行、真如軒涼月の松雲院、望月九知亭に遊ぶ。)

36 十一月朔日、風条老衲の新寮賀筵に歌仙興行。

37 同 廿四日、うかひ山会。

38 同 廿八日、四竹樓にて歌仙興行。

39 十二月六日、旧岡園の年忘会に行く。

右の記述に「遊ぶ」「訪ふ」「一宿する」「招かれる」等、種々の用語があるが、皆俳諧を興行したものと認められる。「紅白園において探題」などとあるのも、俳諧興行の後に余興として探題で発句を吟じたものである。

平橋庵を出て俳諧指導した日数を整理してみると、五十七日になる。これに月次定会十二日と、平橋庵において俳諧指導に当たった二十六日を加えると、総計八十三日となり一年三百六十五日の四十四パーセントが当てられていたこととなる。たまたま見ることが得た、四竹樓杜栄の記録である「四季草稿」の天明六年の部には、杜栄が興行に加わった俳諧が月日順に収められており、連衆名も明白に知ることができる。その「四季草稿」の天明六年八月十八日に興行された歌仙二巻には杜栄はもちろん平橋も連衆として加わっている。また、同年十月の平橋・杜栄の二吟歌仙もある。それらは、「坐右稿」には記載されていない。敲氷が記載しなかった意図はともかくとして、「坐右稿」にも記されない、あるいは不注意で脱落した歌仙興行もあるとなると、敲氷の指導した日数は更に増大し、五十五歳の身には負担過重の折もあつたらう。

## (二) 指導態度

天明六年初陽十二日の平橋庵月次会初会は「梅がかや朝日くり出す綱渡し」という葛浦大隠の発句で始まる。葛浦大隠とは敲水の師である門瑟の別号である。師の発句を立句として、敲水が脇を「するどき声も憎からぬ雉子」と付ける。新春の梅は白き花を開き、馥郁たる香が満ちている朝、渡し場に立っていると日が東の空にさわやかに上って来る。急流の川にはこちらの岸から向うの岸まで太い綱が渡しあって、それを頼りに渡し舟が進んで行く。朝日も勢よく昇って輝き舟も波の輝く水面をなめらかに進行する、といった光景が浮かんでくる。平橋はそれに春の雉子の鳴き声を添える。するどくケンケンと鳴く雉子ではあるが、今朝日さわやかな河の広々とした光景の中では、少しの嫌悪の感じをいなくことなしに快的に聞くことができるかと付けたのである。第三は茂林が「獨活蕨喰うて山居の我まゝ」と付句して、山住みして獨活や蕨を楽しく食べながら雉子の声など聞きつゝ、隠居して心の思うまゝに生きている人物を転出したのである。まことに秀でた作である。連衆廿六人で百韻を完成している。ところでこの脇起百韻は、表紙を別として十四丁の草稿本となっている。表紙には「脇起百韻」とあり、門瑟に加点を乞うている。その成績は、鬼孫十六点、平橋十五点、杜柴十三点である。敲水は師の発句を立句として百韻興行しただけでなく、百韻全体の評価をも受けている。宗匠として自己の指導した作品を更に師の評価を得ることによって確かめ向上したいという態度を尊いと思う。こうした例は、天明六年初秋の定会の作品にも見える。草稿には「天明六丙午歲初秋平橋庵定会」とあり、発句は平橋の「唐黍や風はさながら荻の音」であり、脇句は山鶏の「月もれかしと軒の藁葺」であって、門瑟の作を借用したのではないが、やはり、師門瑟の評を受けている。成績は、鬼孫廿五点、百柴廿四点、五考廿三点となっている。その上門瑟は「坐見歳年易 葛浦老隠」と評語を加えている。

## (三) 「月次句競草稿」について

この草稿は八十八丁からなり、「天明六年丙午春夏之部」と表紙に記されているので、恐らく秋冬之部もあったと思われるが、今は見ることができない。天明六年の「月次五題句合」と同性質のもののようにある。例を一月にとれば、季題として年玉・梅・蛙・藪入・朧月の五題を出し、應募者に五題を吟じた句を出させ、全体として優れた作者三人を選んで、勝・二・三を定めたようである。一月の場合は、勝は杜栄、二は鬼明、三は亀六であった。惣連五十吟。今二月から六月までの優秀者と惣連数を挙げよう。

二月、勝青鳥、二止孝、三杜栄、惣連六十一吟。

三月、勝鬼孫、二柴車、三山鶏。惣連五十吟。

四月、越利十八、其扇十七、涼字十六、惣連六十吟。

五月、勝二葉、二鬼孫、三亀六、惣連五十吟。

六月、勝五考、二陽葩、三山鶏、惣連五十五吟。

右の秀作者を選ぶ判者は誰であつたらうか、安永八年・九年の「平橋庵評月次五題句合」(草稿)は明白に敲氷が評価をしていた。天明五年の「月次五題句合 花青」は、花青が催主となり、最終の評は敲氷が行つたものと推定してよいであろう。そして天明六年の「月次五題句競」も天明五年と同様な状態であつたと思う。それを証拠立てるものは、「天明丙午歳 運斤録四 平橋庵」と記された天明六年十一月朔日より始まる記録がある。このメモ帳の中に「五題句合山鶏」「月次五題山鶏」という短い記事がある。「五題句合山鶏」は「山鶏五題句合」について指導したという意味である。とすれば「月次五題山鶏」は「月次五題句競」について山鶏に指導したということになる。このことからして天明六年の句競の最終の評価は敲氷が行つたと見るがよい。

しかし敲氷が多忙な宗匠としての活動を山鶏に分譲したいと考えていたことも忘れてはならない。花青の号を山鶏

と改めたのも天明六年からであり、「坐右稿」の天明六年十月二日の記事に「山鶏の招き侍りしをいなみなく、東西の諸好士寄つどひて、一盃一興に夜のたけなはなるをしらず、猶明るあしたもたゞには過ぎじと聞えけるに「夜遊びも朝寝もまゝよ神の留主 氷」歌仙興行。」とあり、三日には「山鶏のもとに会して、おのゝ題、小春、「獅子舞の田舎を歩行小春哉 氷」とある。この山鶏の招きは、敲氷門下の俳人に宗匠と言わなくても父の代理の立場を承認して貰う意図であったと思われる。

四 「天明丙午歳、『運斤録』をめぐって

『運斤録』について解説は既に『信州豊南女子短期大学紀要』創刊号の九一頁に記したので、ここでは省略する。

敲氷は旅に出た時は「袖日記」あるいは「袖中日記」に克明な記録をしているが、更に『運斤録』というメモ帳に発句や歌仙・百韻などを記録して置き、秀句を得るために指導する際の参考としている。ふと脳裏に浮かんだ句のメモ帳でもあった。ところが天明六年の「運斤録四」は十一月朔日から記録してあるメモ帳ではあるが、敲氷に指導を乞い、指導を与えた、作品の種別とその作者名と住所とだけが記録されているメモ帳である。次に十一月の部を掲げる。

五題句合（八王子連柳同）百韻（花輪漂麦）百韻（袖ノ木連）五十韻（袖ノ木連）百韻（花輪貞松）歌仙（神内川）三題句合（一条町）歌仙二卷（一条町連）歌仙（杜栄）歌仙（越後出雲崎）百韻（平坡）七題句合（万力芳山）四季句合（鯉沢）歌仙（青柳）五十韻（青柳）五題句合（山鶏）歌仙合六卷（袖ノ木春竹）百韻（勝沼）百韻（花輪）百韻（田中）歌仙（高橋連）句合（荊沢秋水）百韻（勝沼平坡）十題句合（越後石瀬）五十韻（同処）七題句合（万力連）句合（一条町）百韻（花輪和秀）三句立（元齋）歌仙（石森二葉）歌仙（未木連）百韻（うかひ山靈名軒）月次五題（山鶏）百韻（花輪和秀）四季句合（大師涼月）歌仙十五卷（大師涼月）歌仙（神内川連）奉納句合三百句（和泉竹彦）百韻（石和季道）百韻（漂麦貞松）歌仙（休息連山鳥）句合（一条町）百韻（勝沼平

坡) 歌仙 (一条町亀石)

(注) ( ) の中の傍線を引いたのは地名。地名の下が作者名である。地名だけのものは、その下に連を加えて作者連を示している。

右の俳諧作品を分類すると、句合が十四、三句立が一、歌仙が三十三、五十韻が三、百韻が十四となる。十一月朔日から指導した作品ということはわかるが、全二二丁に、終わりの月日の記載も途中に月日の記録もない。恐らくは天明六年十一月から十二月まで、二箇月間に指導したものであろう。そう考えると敲氷のエネルギーな活動が思いやられる。そうした中で長男山鶏を自分を有力に補助できる一角の俳人として活動させたいという願望を持つに至ったと思われる。